ある挫折

小坂田玲子

人は迷い、とまどい、悩み、挫折しながらも生きているのであろう。そして、迷い悩むことにより、一歩一歩成長していくように思う。とはいえ、そのさ中にいるときは、なんともやりきれないものである。

かつて私は子どもたちに〝あれもさせたい、これもさせたい〟と思い一生懸命指導していた。しかし、子どもたちは虚な目をして私をみているだけで全く動こうとしなかった。

これは一体どうしたことかと自問しつつ、叱咤激励の指導を続けていった。しかし私が指導しようとしてもがけばもがく程、子どもたちはさらに無気力になっていくという悪循環の連続であった。功を急ぐため小言は多くなり、ぐずぐずしている子どもをみると怒りがこみあげてきて〝早くしなさい〟と思わず叱ってしまう。従って子どもとの距離はますます大きくなり、私はいらいらしながらも救いの道を求め続けていた。そしてそんな中で私はようやく、私が直接子どもに力を加えたり、主導権をとったりすれば、子どもらが受身の状態になり、結局自分自身の足で歩けないだけでなく無気力にすらなっていくことを知った。子どもら

に指示を与え、教え導くことは私の責任であり、義務であるという私の思いが面前に出すぎていたのであった。そういう私の思いが私をして、独断、偏見、身勝手にさせてしまい、子どもの心情、真情を傷つけていたのである。私は足のすくむような思いであった。この生々しい実態を打開するには、自分を変えるより他に道はないということも思い知ったのである。

以来私は一大決心をして、主導権は基本的に子どもがとるということに変えようとしたのである。教えるよりも子ども自身で発見し、吸収することに主眼をおいて子どもから学ぼうとしたのである。しかし、言うは安し行うは難しで、長年染みこんできた自分の基本は容易に変えることはできないのであろう、ついロがでたり、手がでたり、あるいは先回りをしてしまう自分があった。毎朝、今日こそはと決意して出勤するが、いざ子どもの中に入るともろくも破れて、ああまたやってしまった、とやりきれない空しさを感じる日々が続いた。明けても暮れても闘争が続き、そしてとうとう夜も寝れなくなり不眠症になってしまった。それでもまだ魔物にでもとりつかれたように神に祈り、自分に誓い、今日こそはと決意して出勤する自分があった。そしてまたもや空しく破れ〝ああまたやってしまった〟のくり返しであった。こんなことが何カ月続いたであろうか、ついに精根尽きはててダメだ!! 私にはもうできない、と観念せざるを得ない状態になった。絶体絶命の極限状態にあったのである。世界が開けるとか、道が開けるというのはどうやらこういう状況に直面した時のようで、不思議といえば不思議なのだが、しばらくして気がついてみると、自分の体が自分とは思えない位軽くなり、さわやかに心地よくなっていたのである。子どもの行動をゆっくりみることができるようにもなっているのである。いや、子どもが動いていたのである。子どもの動きが何のさえぎりもなく目の中にくい入るように鮮かに入ってくるではないか。すべての邪魔物が私の体からもぎとられていったような不思議な経験であった。今日こそはと決意して、必死でもがいている時は、やってもやってもできなかったことが、もうできないと観念した時からできるようになっていた。本当に自然にできるようになっていたのであった。

こうした経験がどうして起るのかは今でも分らない。ただ言えることは、する世界ではなく、訪れてくる世界、なっていく世界のようである。決して、意識的、意図的にどうのこうのできるレベルのことではないということだけは、はっきりと感じている。

この経験から私は、自分の目で見、自分の耳で聴き、体でたしかめながら自分自身の概念を組み立てていくことの大切さが分ったのである。そしてこれを契機として私の保育のあり方や、子どもの見方が大きく変ったのである。丁度、十年前のできごとであった。

人間というものは、そもそも変転憂苦の連続の世界をさまよいながらも、建設的な方向へ進む資質をもっているようである。私は、この人間の成長力を信じ、今もなお、迷い、とまどいのくり返しの中で、暗中模索しながらも、その時、その時を精一杯生きようとしている。

（東京・駕籠町幼稚園）

私のまよい

山本秀子